

タンザニア近況

—— 現地生活を通じて見たこと、考えたこと ——

吉 田 昌 夫

I 7年目のタンザニア

今年の5月4日、7年ぶりにタンザニア生活をする事になりダルエスサラームに到着した。その第一印象は、ホテルのアフリカナイゼーションが進んだことそれに道路がきたなくなったことだった。到着してまず宿泊したNew Africa Hotelは、7年前の1972年2月に2年2カ月の滞在を終えて日本へ引き上げる前日に家族とともに1泊した政府直営のホテルである。当時は古い植民地スタイルの建物を壊して近代的なものに建てなおしたばかりで、まさに高級ホテルといった風情で外国人観光客がいきかい、アフリカ人の姿は従業員の他はほとんど見られないような所であった。それが今は道路に面した一階のレストラン兼コーヒー・ショップはタンザニア人であふれている。そして宿泊客も、二階の少し高い食事を出すレストランの客も、黒人がほとんどである。まわりで食事している人達は皆私と同じものを食べていて、ウェイターも外国人だからといって特別サービスに努めることもなかった。私にはウェイターのサービスが遅いことより、この平等感の方にタンザニアの最近の歩みが感じられたのであった。

道路は確かに悪くなっていた。排水口がつまってしまったのか、雨が降ると道路はたちまち水であふれた。もっとも今年は異常に降雨量が多く、近年にない長雨だということだった。5月に終わるはずの雨期は6月になっても終わらず、地方では多くの橋が流され、道路が壊されて、交通はずたずたに分断されているようだった。町の中でも低地には水がたまり、工場地帯に雨水が流れ込んで、操業中止となった工場の名前が続々と新聞に出るようになった。やがて私はタンザニア人の道路修理担当者の怠慢よりも自然の暴威を責めるべきだろうと考えなおした。

ダルエスサラームの町中を歩いたり、新聞を読んだりしているうちに、7年前に計画されたものが、ようやく最近になって完成したか、あるいは完成に近づきつつあ

るということがわかってきた。それらはたいてい3～4年で完成するだろうといわれていたものである。空港と町を結ぶ道路はそういうもののひとつで、すばらしい4車線道路に変わっていた。高層ビルも新しいのが三つほどでき上っていた。しかし、その一方で昨年解消した東アフリカ共同体関係の建物、すなわち郵便通信公社や東アフリカ航空のビルなどは、工事が中断されていた。

重要な変化としては以前には6つしかなかったダルエスサラーム港の埠頭が11に増えており、前には必ず5、6隻はいた沖待ちの外航船が1、2隻しかなくなり、日によっては、船はみな埠頭についていることだった。これは埠頭施設が大きくなったこともあるが、もうひとつの理由としてタンザン鉄道がたまたま土砂崩れなどのため1カ月ほど運休になっていて、ザンビア向けの荷役が少なくなったためだったという説明をうけた。

町に行く人々の服装がよくなったことには目を見はした。以前にはたしか、すその広がったズボンやミニスカートとともに政府から禁止されていたはずだが、今や若者たちは皆すそ広がり地面にとどくようなズボンをはいている。娘たちは皆かかとだけではなく底全体が高くなった靴をはいて、かっ歩している。前によく見られたほろほろな穴だらけのアンダーシャツだけを着た人などは、ダルエスサラームの町中では全然見られなくなった。このことは皆が豊かになったというよりは、他人と同じようなおしゃれをしたいという欲求が強くなったこと、要するにファッション性が強くなったことのように思われる。というのは食生活の方は少しもよくなったようにはみえないからである。人々は7年前と同じように変わりばえのしない簡素な食事を毎日食べている。しかも最近では、外貨事情が緊迫しているため、以前は手に入ったバター等の外国の食料品も品薄となり、国産品による代替もないため、むしろその内容は貧しくなったのではないかとさえ感じられる。

ダルエスサラーム中央市場があるカリアコー (Kariakoo) に行ってみて、また驚いた。デザインの面からだけ

いはずばらしい、コンクリート2階建ての巨大な建物が建っていたのである。ここには以前は、鉄柱に鉄板屋根だけの、あまり清潔とはいえないが、とても活気のあるマーケットがあって、各種の野菜や魚、肉、小間物などを、多勢のアフリカ人小売商人（ほとんど男ばかりで女性商人は少ない）が売りさばっていたのである。マーケットのまわりにはアジア人（インド・パキスタン系）の店が並び、穀物、日用品類それにマコンデの彫刻（黒檀の彫物で名高い）などを売っていた。それが野菜を売る所だけは、元の建物を小型にしたようなマーケットとして残って活況を呈していたが、超近代的な建物のかげに隠れるように存在しており、本体の方はといえば、肉屋、びん詰・缶詰売場、マコンデ彫刻売場などがばらばらと入っており、何となくがらんとしてあまり活気は見られず、有効に建物が使われているとはいえない状態なのである。マーケットというものは、もともと自然発生的な要素の強い場所であり、だからこそいつも活気がみなぎっているのであるが、ここでは外国からの援助による異物が妙な形でこの土着的な活動分野に入り込み、調和を乱してしまっているように見える。

II 対アミン戦争とタンザニア

1971年に隣国ウガンダで、当時の軍司令官アミンがクーデターを起こして大統領オボテを倒してから、ウガンダとタンザニアの関係は悪化の一途をたどった。タンザニアは英連邦首脳会議中に遂行されたアミンのクーデターを帝国主義的な陰謀としてとらえ、オボテを自国にかくまうと同時に、党がガイドライン（スワヒリ語でMwongozoと呼ばれる）を発表して、大衆参加による政策決定の方針を打ち出し、またタンザニア正規軍(TPDF)の他に、学生奉仕隊(National Service)の強化と市民軍(Milita)制度の導入をはかって、軍事クーデターが自国におよぶのを防ぐための機構整備をはかった。しかしウガンダはケニアとともに東アフリカ共同体の構成国であり、タンザニアにとって友邦つきあいを続けていく必要があったので、公然とアミン政権と敵対することを避けてきたのであった。

1977年になって東アフリカ共同体が瓦解し、1978年10月にアミンがタンザニアの湖西州の1160平方キロにわたる地域を突如として自国領であると宣言し、1カ月にわたって同地域を占領する事件が起こった。タンザニアはこれを契機にウガンダのアミン政権と全面的対決に転じた。タンザニアに避難していたウガンダ人亡命者グルー

プとタンザニア正規軍は協力してウガンダ軍を追撃した。さらにタンザニアは市民軍の参加をつのって、最終的には約4万のタンザニア兵がウガンダ領内に攻め込んだ。当時のウガンダ経済は政府資金の多くが最新式兵器購入など軍事力増強に使われたため、破綻をきたしていたウエアミン政権はすでに自国の軍隊の全面的支持を失っていた。リビアの援助があったにもかかわらず、ウガンダ軍は完全に意気喪失していたため、さしたる抵抗を示すこともなく敗退し、アミン政権は崩壊し、アミン自身は国外に亡命したのであった。一方、この直前1979年3月26日に、それまでばらばらに存在したウガンダの解放運動グループは、タンザニアのモシで会議を開き、統一したウガンダ国民解放戦線(Uganda National Liberation Front)を急拠組織した。4月13日にはこれが母体となってウガンダ国内に新政権を樹立するのに成功した。タンザニアにとってはこの対アミン戦争は、弾薬その他の武器を急いでスポット買いで集めなければならなかったため、経済的には非常に高いものについた。1978年10月から79年10月までの軍事費は40億シリング(約4億8800万ドル)に達することになろうといわれている(6月18日のニエレレ大統領の演説)。

これより前、タンザニア経済は、1974年、75年と、石油ショックに続く農業不振で外貨が涸渇した危機を迎えたが、その後の農業生産回復と76年、77年のコーヒー世界市場価格騰貴が幸いして国際収支の好転を見、このところ比較的着実に国民所得を向上させてきた。1967年から76年まで10年間の国内総生産の年平均成長率は実質で4.3%、77年の成長率は5.9%、78年は5.6%であった。しかし1978年後半には農産物輸出価格の低落と、綿花、カシューナッツ、丁字など一部の輸出向け農産物の極端な生産低下があり、一方、輸入の部分的自由化のため輸入額がどっと増えて、再び国際収支が悪化しつつあった。そこへ対アミン戦争の出費が重なったのである。この戦費は最近アフリカの他地域で起こった戦争によく見られるような外国の軍事援助に全面的に依存する方式と違って、タンザニア自らが全額を捻出したため、経済上の困難は目に見える形でひしひしとせまってきた。米や小麦粉は軍隊への支給の方に優先的にまわされたのか、5・6月頃は町からほとんど姿を消し、砂糖や塩がなくなる日もあった。政府は輸入ライセンスの発給を削減し、その影響で、たとえば機械や自動車の部品を手に入れることは至難のわざとなった。

このような時期にタンザニアは、またもOPECによる

原油値上げというパンチに見舞われたのである。ニエレ大統領は、ウガンダから大部分のタンザニア兵の引揚げを完了した9月1日に、国民全員に向かって耐乏生活を呼びかけ、今後18カ月はこの苦しい状態が続くであろうと告げ、また政府はこの困難を国民が一人残らず公平に背負うようにするため全力をつくすと宣言した。耐乏政策の一環として、政府はまず自動車の燃料消費を抑える措置を発表した。全国のガソリンスタンドは木曜日夜から月曜日朝6時まで閉鎖されることになった。ことに全車輻燃料消費量の65%を消費している政府・公社・公団など政府関係機関に属する車については特別な理由がない限り、1台あたり1週間に60リットル以下のガソリンしか供給しないことになった。(実際には1台を2名以上の者が使用する場合は70リットルまで許可される。またディーゼルの場合は前述の数量制限は適用されないが、販売スタンドが限定され、さらにドラム缶で買う場合は許可制となった)。この措置には政府関係の車が公務員や公団職員の私的な用事に使われることを防止するという意図が強く働いているといわれている。

しかしこの自動車燃料使用制限はさまざまな問題をひきおこしている。そのひとつはタンザニアのように、日本の国土面積の2.5倍もある広大な国土全域に住民が散らばり、特に奥地の周辺部分に人口が多く、輸出向け農産物生産も盛んな国では、下手をすると集荷活動や肥料その他生産投入財の運搬などに支障をきたし、流通まひを起こして生産活動も縮小するようになりかねないという問題であり、他のひとつは、このような車のむだをはぶく努力が、公務員がやるべき仕事をやらないことの口実に転化され、公務員の怠慢助長とならないかということである。後者については、あまり口に出してはいられないが、懸念する人は多いであろう。

対アミン戦争の遂行に対してはタンザニア国民は、ほぼ一致して支持しているといつてよいと思う。「ファシスト」のアミンを倒したことは、第2次大戦に連合国側が「ファシスト」ヒトラーを倒したことと同じようなものであり、アミンが先にタンザニアに侵入したのを押し返して、これを崩壊させたことは正当な自己防衛であると、私が意見をきいたさまざまな範囲の人からほとんど一致した答えが返ってきた。南部アフリカの南ア共和国、ローデシア、ナミビアにおける白人による黒人人権の剝奪と抑圧に対し、常日頃から積極的に反対を表明し、これらの国の反政府勢力をかくまっているタンザニアにとって、身内ともいべき黒人国家の中に、同じような

人権剝奪や集団殺りくを行なうような指導者がいたら、断固これを排除しなければならないとする議論は明解で、一般的な「内政不干渉」という議論より国民も理解しやすく、それが今度のタンザニア政府がとった行為に対する強い支持となって現われたものと思われる。

9月のある日、私はダルエスサラーム大学内で、市民軍に入ってウガンダへ出撃し、帰還した大学職員達を歓迎する式典が開かれることを聞き、大学講堂前で何が始まるか見ようと待ちかまえていた。政府要人、唯一の政党であるチャマ・チャ・マピンドウジ(CCM)の要人、帰還した職員達が入場した後、どっと入口から中へ流れ込んだ学生達に押されて、私も中に入り、席についた。要人達は正面の壇の上につき、帰還者達は会場の前列の横の方にすわった。かれらは全員が軍服を着ているのではなく、軍服のものもいれば普通の服のものもいた。

やがて太鼓が打ち鳴らされるや、右側の戸口より一列に並んだ女性達が踊りながら、ねり進んできた。やがて彼女らは丸く輪になって腰をふり、しばらくの間精力的に踊りまくったあと、また一列になって踊りながら退場した。次は小学校5年生位の子供達の踊りだった。時にアミンを倒した寸劇などを入れながら、リズム感のよい踊りを見せた。次には伝統的な木琴などを使った音楽ののって、これも伝統的な衣裳をまとった踊り手の一団が入ってきた。中には大学教員も入っているのか、学生の中から笑い声が起こる。彼らが盛んに踊っていると、壇の上から要人の一人が降りてきて、輪の中に入って踊り出し、皆から拍手をあげた。隣にいた学生にきいたところ、この人は国防政務次官(Junior Minister for Defence)だということだった。やがて式典は30人ほどの帰還者に対する賞品授与に移ったが、これが何と賞品の受け取り方、敬礼の際の手の位置、足の動かし方など各人各様の個性まる出しで、即興的な踊りを見ているような感じがした。市民軍とはいえ戦争からの帰還式典でこのように個性を発揮する彼らには、規律に服するという事は全くつらいことであろうと思われた。少し飛躍しているかも知れないが、彼らが中央集権制による強制にもとづいたスターリン主義的社會主義の方向にむかうことは絶対にないであろう、という見通しを私はこれで持つことができた。その後国防政務次官の演説があったが、これも途中で彼自身が音頭をとって出席者全員に歌を歌わせるなど、全く楽しいといつてよい式典であった。もっとも今度の戦争は、これからの経済への影響はさておいて、戦闘そのものはタンザニア軍の死者約400名という比較

的少ない犠牲で終わったので暗さなどは全然なく、したがってこのような楽しい祝賀式典ができたともいえる。

Ⅲ ルフィジ河下流平野再訪

9年前の1970年8月から1年半にわたって私が従事したルフィジ河下流平野の農業調査は、将来上流のステイグラー峡谷に大規模の多目的ダムを建設した場合、この地域の農業にどのような影響があるか、という課題に答えるためのもので今後の変化を予定してのベースライン調査の性格を持つはずのものと考えることができた。この判断にもとづいて私は農業および農家経済の現況を克明に記録しようとした（その内容については『アジア経済』1971年3月号、1975年4月号、『アフリカ研究』16号 1977年に報告した）。

当時は調査の参考にしうる同地域の文献がほとんどなかったため、全く何もかも初めからやらなければならなかったが、その後ダルエスサラーム大学の地理科付属研究所 (BRALUP) がこの地域を対象として精力的な調査を実施し、報告書が続々と出されているのをこちらにきてから知り、自分が調査の先鞭をつけたような気がして大変うれしかった。前から問題とされていた電力開発と治水および農業開発という多目的間の相互矛盾の関係は、タンザニア政府の依頼をうけたノルウェーのコンサルタント会社が電力開発の面だけを取り上げ他の面は切り捨ててダム建設を推進するフィージビリティ調査を行なったのに対し、BRALUP を中心として環境問題の面から調査が行なわれて、電力重視のダム建設によっては年ごとに程度の異なる洪水は完全にコントロールはできず、そのうえ堆積土が流れなくなるため、下流部の農業、えび漁、マングローブ生育などにむしろ悪影響となって現われるであろうという議論が展開されて問題となっていた。

また私の調査当時は、ウジャマー村設立の意気込みがタンザニア政府内でも強かった。私のフィールドであったルフィジ郡はその政策の尖兵の役割を負わされて期待がかけられていたが、集村化の完了した現在はむしろ農業生産が極端に低落して問題視されており、ルフィジ河氾濫原の住民に対し、政府はどのような手を打ったらよいかかわからず困まっているという声も聞えてきた。私はこの地域が現在どのようになっているか一目でもいから見たいものだと思っていたが、最近そのチャンスが訪れた。

BRALUP の研究員で、ルフィジ郡の手工業調査を行

なっているノルウェー人のH氏が調査旅行に出発するというので、往路は彼のランド・クルーザーにのせてもらい、ルフィジ郡庁のあるウテテで一泊したのち、帰路はバスをつかまえることにして、10月16日の朝10時頃、大学を出発した。ダルエスサラームから127キロ先のキビティ (Kibiti) までのユーゴスラビアの援助でできた舗装道路は、穴もほとんどあいておらず、よい状態に保たれていた。

キビティにはバンツー・ホテルという名の飯屋兼宿屋があつて、以前ルフィジにきた時は必ずここで食事をしたものである。また調査を行っていた時ラマダンあけの日に調査員全員をここに集めて、調査の状況報告と問題点の検討をするため、皆で一泊したこともあった。バンツー・ホテルのアリ老人は、昔と同じように帳場にすわっていた。「今日は。元気でしたか」「ああ、ずっと元気だよ」彼は答え、こちらがあごひげをのぼしているのを見て、「変わった、変わった」といってからかった。6シリングのとり肉汁つき御飯 (Wali na kuku) が前と同じようにおいしかった。近くのマーケットでは久しぶりにほうずきのような小さなトマトと、長さ25センチもある大きなオクラとを見た。

このキビティで道路の舗装は切れ、道は二つに分かれて、左へ行けばイクウィリリを抜けてルフィジ河フェリーへ、右へ行けばムコンゴを抜けてウテテのすぐ手前でフェリーとなるのであるが、どちらの道をとっても雨が降れば道はものすごくぬかるみとなる。特に河の手前5キロほどはひどくて、これにはまったら最後、脱出に四苦八苦しなければならなくなるのである。

この日われわれは、昼食の後、2日ほど雨が降ったため道が悪くなっていると聞かされたが、それでもバスやトラックが走って行くから何とかなるだろうと左のイクウィリリ経由の道をとった。やっと河岸に着くと、トラック、バスなど10台がこちらの岸でフェリーを待っており、向う岸にも同じくらいの数のバスやトラックがいるようだった。見るとフェリーに乗ろうとしたトラックがパンクし動けなくなっているのがであった。ここでわれわれは3時間近く待つことになった。すなわちこのトラックの積み荷を下して、他のトラックがワイアを使って引き戻すまで1時間余、次のトラックがフェリーに乗って向う岸まで行ったのはよいが、また向うでつかえてしまい、その積み荷を下して脱出するまで1時間余である。あたりは暗くなり始め、河岸で野宿することを考え始めた時だった。通常6時で止めるフェリーをできるだけ遅

くまで動かすとの知らせがあった。暗くなったらどうするのだろうかと見てみると、トラックは後まわしにし、まず乗客を全部おろしたバスをこちらから3台、向うから3台と1台づつ渡し、次いで乗客と共にわれわれの自動車を渡してくれた。おそらくこれがその日の最後の渡しであったと思う。

こうして私は、それまで忘れていた、ルフィジ河を渡るといふことは何と難しいことか、ということをおぼろげに思い出した。それと同時に、この昔と同じのぼろぼろのフェリーを操作する船頭たちの技術に今さらのように感心した。いつも何か支障があるのだが、待っていると何とかこれを直して動かしてしまうのである。このフェリーのようなそれほど複雑でない機械を操作する場合の彼らの創意はたいしたものである。それにトラックを後まわしにし、旅なれない客が多勢乗っているバスを先に通した彼らの判断もよかった。またこうしたさまざまな支障が除かれるのを待っている間、人々が河を渡るという共通の難題を前にして親しみを増し、互いに打ちつけていく情景は、ルフィジならではのものである。ここに私は以前と変わらないルフィジを見出した。

翌日私は、バスがこなかったのので、たまたまダルエスサラームに行くという郡長官(Area Commissioner)の車に同乗させてもらって帰った。わずか2日間の訪問で、前に知り合った農家の人などにも会えなかったが、集村化が徹底したこと、氾濫原の道が以前と全然別の所につけられていること、以前に家屋があった所がすでに何の痕跡もとどめていないことなどに驚いた。家屋が木と土でできているため、自然への復元はまことに早く、またその自然も洪水氾濫のため刻々変化する。

例年なら収穫期に入っているはずの綿はまだ花を咲かせていた。雨期の未曾有の氾濫で播種が遅れたためであろう。

IV 非能率と助け合い

アラブ諸国をまわってタンザニアにやってきた日本人の旅行者がこんなことをいった。アラブの街で道を尋ねたら、たちまち多勢の人間が集まってきて、あそこだ、いやそこではない、こっちだ、いやそうではない、と大騒ぎの議論になり、かんじんの道をきいた本人のことはそっちのけのようになってしまった。タンザニアで道を尋ねたら、それはあそこだと間違った所を教えられ、次の人にきくとまた別の間違った所を教えられ、結局大まわりしてさがし当てた所は、最初に尋ねた人のいた所の

すぐ前だった、というのである。

タンザニアの人達はあっさりしていて、あまり厳密に事の当否を確定しようとしなくせがあり、同時にあまり「知らない」とはいいたがらない。New Africa Hotelと海岸ぞいのホテル数箇所を結ぶマイクロバスは安くて便利なのでよく利用したが、時々こないことがある。ホテルのフロントで尋ねるとその答えは一人一人違っている。ある人はもう行ってしまったというし、ある人はまだこないという。ある人はもう今日はこないという。こちらはどれが本当かわからないのでいらいらしがちである。

最近、時刻表というものが姿を消してきているのも目立つ。新聞にラジオ番組がのらなくなった。国営航空のエアタンザニアのオフィスに行っても、客用の時刻表はなく、職員もガリ版刷りのものを使っている。鉄道にしてもバスにしてもそうだ。どうせ時刻は守られないのだから、むしろない方がよいと自嘲気味の声もあるが、物事を計画的に行なおうとする人にとっては大変な不便さである。

ダルエスサラーム市内のバスサービスのひどさといったら比較するものもないくらいで、まずは最低だという声が強い。市内バスは公社の独占事業となっているが、バスの台数が需要に比べてもともと少なく、その上稼働していない台数は通常その5割に近い。時間になっても勤務につかない運転手が多い上に、よく故障するからである。ようやくきたバスには列をつくらずに乗客が殺到し、そこでは適者生存の原理がつかぬかれている。

こうして毎朝、いつくるともわからないバスを待つ通勤者が道の両側に立ち並んでいる姿を見かける。これでは勤務先に時間どおりに到着して仕事を開始することを期待する方が無理というものであろう。銀行などの大きな公営企業は自社専用のバスを用意して職員の送迎にあたっているが、多分それがバス公社の改善を遅らす結果にもなっているであろう。

このような状態であるから、自発的な助け合いの精神もまた盛んである。私が現在住んでいる Silversands Hotelは、ダルエスサラーム大学が経営しており、市外の約25キロ離れた所にあるが、近くに砂利採取所とセメント工場、兵営などがあり、市内へ通ずる道路にはダンプカーや大型トラックが頻繁に走っている。このダンプカーやトラックが無料タクシーをやっているのである。一般にこの国の人達は人見知りせず、誰にでも自動車に乗せてもらおうとするのであるが、ダンプカーやトラックの運転手も、待っている人がいると、わざわざ止って乗せてや

るのである。ここの道路でいつもひやっとさせられるのであるが、自分で車を運転していると、前を走っている大型トラックが急停車する。それは道に立っている人を乗せてやるためである。タンザニアのように民衆の手とどかない所でどうしようもない困難が引き起こされる国では、それだけ助け合い精神も発揮されるのであろう。

V 農村工業化の径路

1976年7月1日より始まったタンザニアの第3次経済社会開発5カ年計画は、工業開発に力点を置いているが、その中の重要な柱の一つとして、簡単な技術を使うことのできる小規模工業を地方へ、特に農村に設立することをあげている。これまでも開発途上国で、労働集約的資本節約的な特徴を持ち、土着的な技術からそうかけ離れていない、習得の比較的容易な技術を使い、国内の資源を材料として使うことのできる小規模工業を広く農村に創設することの重要性がしばしば叫ばれてきたが、タンザニアもその工業化の過程で農村工業創設の必要を強調するようになったのである。

私はタンザニアが農業開発においてはウジャマー村政策に見られるような生産協同組合化を、農村工業開発においては産業組合指向の政策を採用していることが今後どういう展開を見せるかに興味を持ち、今回のタンザニア滞在中に、産業組合 (Industrial Cooperatives) 方式で経営されている小規模工業をいくつか調査してみたいと思っているのである。現在までのところ10企業ほどの農村工業を、モロゴロ州のキロサ (Kilosa) 周辺とタンガ州のコログウェ (Korogwe) 周辺、それにキリマンジャロ州のモシ (Moshi) 周辺に選んで、第1回目の訪問で各々の設立に至った動機の調査を終え、今後より詳しい運営の状況を調査しようとしている。

農村工業といえば、それはヨーロッパの、特にイギリスの、産業革命を成し遂げるに至った原動力であったのであり、資本主義形成に欠くことのできなかつた精神、マックス・ウェーバーのいう資本主義の精神を持った企業者が、その農村工業の中核を占めていたことを思い起されるだろう。しかし現在のタンザニアを考える場合、この発展の構図をそのまま当てはめることができるだろうか。まずタンザニアにおいてはすでに19世紀中頃より先進資本主義の経済圏として、その中に巻き込まれ始め、70年間の植民地としての歴史の中で、世界経済の一環としての低開発地域として組み込まれている。1961年の独立後、67年のアルーシャ宣言において社会主義をめざす

政策を採択し、それまでに設置されてきた外国資本の大企業を国有化した。こうして大規模の工業はみな国家によって所有され、運営される方式が、タンザニアでは制度化されてしまっている。

このような制度のもとで農村工業化をはかるといことはいったいどういうことなのだろうか。タンザニアで現存する農村工業といえば、農産物の第一次加工といってもよい繰綿工場、コーヒー剥皮工場、搾油工場、製糖工場、製粉工場等の他は、木工場、衣類縫製工場、金属加工工場、製材所などがあるだけである。農民の家庭で日用品として使われるほとんどの品物は、輸入品でなければ、都市の大工場で大量生産される品物だ。綿布、なべ、食器、靴の類から、農機具に至るまで、すべて都市に位置する大工場で製造される。タンザニアは農業国であるがその全農民が使う鉄でさえ、ダルエスサラームにある一工場でありあまるほど作られてしまうのである。

農村工業が直面する障害はまことに大きい。特に私がこれまでの調査を通じて感じたことは、農村工業の経営者の政府依存の態度があまりにも強いことである。自らの責任において経営を成功させ、企業を拡大していくような、いわゆる企業家精神に富んだ経営者はごくまれのようなのである。しかし大企業が国家の管理下にあつて競争が限られ、資本主義ではなく社会主義を指向している社会の中では、それも当然のような気もしてくる。現在ほとんどの開発途上国は、このようなジレンマにとらわれているのであろう。現代では、工業発展の径路が農村工業の発展から都市の大企業へという方向でなく、すでに都市の大企業が存在するうに農村の小規模工業を創設していかねばならないという問題をかかえているのである。この発展の径路の逆転の意味するところはまことに大きいといわなければならない。

しかし国民経済をつくりだそうとの願望が存在する一方、少数の大企業がすべての国民需要を満すことは不可能だということは確かなので、国民の大部分が農村に住むタンザニアのような国では、農村工業の創設が必要とされていることは明白である。圧倒的な不利な条件のもとで、農村工業を成功させるには、やはり強い精神が必要であろう。それがもはや「資本主義の精神」ではないとしたらどのような精神なのであろうか。

私は以上のような難関にとりつかれながらも、実際にはタンザニアのペースに調子を合わせてゆっくり生活を楽しみ、かつ人びとの生活を観察するつもりである。

(アジア経済研究所在ダラエスサラーム海外調査員)